

私と野球 2（高校野球終了まで）

中学校に入る時、私の住んでいた所は秋田西中学校と山王中学校の共通学区だったため、どちらに進学するか選択できた。どちらに行くにしても距離は同じくらいだったし、橋を渡っていかなければならない地理的条件は同じであった。ただ、野球の実力は秋田西中の方が上だと聞いていたので、秋田西中に進学することを決めた。大した決断では無かったが、このことで私の人生は、野球にまつわるいろいろな良い出来事を生むことになった。

中学校に入学後、当然のように野球部に入部したが、後には、先に綴った浜田小の相原君をはじめ、悔しい負けを喫した日新小学校のメンバーのほとんどと一緒に入部してきたのだ。全く意識していなかったが、彼らは意外さと嬉しさが混じった感情でいたことは何となく分かった。いいチームメイトになれた。

そして恩師にも恵まれた。この年に下浜中から転勤してきたのが角崎先生だった。先生が育てた山岡バッテリーはその後秋田商業と秋田高校で素晴らしい活躍をした。先生自身も昭和41年の夏、一番ショートで甲子園の土を踏んでいる。そんな先生に巡り会えたことで私の野球人生も大きく変わっていく。

1年生の春、本荘市の選抜大会に、唯一人1年生で連れて行ってもらった。まだ何もわからないので、持ち物や服装について先生に聞いたら、「野球に必要なものと体育着でいいよ」と笑って教えてくれた。何せ野球部で遠征など初めての経験である。何をしても良いか全く分からなかった。

試合当日、練習を終えて球場に向かう時、1年生なのでほとんどの道具を担いで歩いていたら、私が重そうにしていたのだろう。当時コーチをしていていた文先輩（故佐々木文博さん）が、先に行く先輩たちに向かって「おい、少し持ってやれ」と声を掛けてくれた。普段は怖いとだけしか思っていなかった文先輩に助けられて、野球部の先輩方には申し訳なかったが、とても嬉しかった。

試合は劣勢だったと思う。バット引きをやっていたが、突然角崎先生から代打を告げられた。試合の様子などは全く分からなかったが、急いでバットを持って打席に入った。相手の投手は左投げだったのは覚えている。追い込まれて、なんとかバットを振りにいったらインコースへ曲がり落ちてきた。「えっ、嘘だろ」と思った。左投げの投手が投げるカーブをこの時初めて見たのである。手元に曲がってきたボールに何とかバットを当てた。よく当たったものだ。打球はラッキーにも一塁手の後方にポテンと落ちてファールグラウンドへ。足は遅かったが、一気に二塁まで走って行ってセーフ。ベンチからは「おー、すげーっ」と歓声が上がっていた。とにかく必死だった。

次打者の1球目。タイムをお願いしてベンチに戻った。角崎先生に「どうした？」と問われ、「すみません、サインが分かりません」と素直に答えた。ベンチ内は爆笑だった。苦笑いしている先生は「いいがら、バッターが打っ

たら走れ」と言ってくれたので、一目散に二塁へ戻った。

この試合で、ランナーは打者がファールを打ったらベースにリタッチしなければいけないことも教わった。何とも恥ずかしいことである。いろいろあった遠征試合だったが、いろいろな経験ができた。中間試験直前だったので他の1年生は試験勉強をしていたが、私にとってはありがたい経験だった。帰ってからは感謝の気持ちもあって猛勉強した。結果は野球部内では一番の成績で、学年でも順位は約300人中一桁だった。野球を理由に勉強ができないと言っはいけないと角崎先生は教えてくれた。これは文先輩も同じであった。

この文先輩にも鍛えられた。やたら細いノックバットと青灰色のユニフォーム（左胸にBの花文字）がトレードマークの先輩だったが、非常に厳しかった。先輩は中学時代に全県優勝の経験を持つ。身体は小柄ながら、キャプテンも務める名内野手だった。私たちにその喜びを味わわせてやりたいとの情熱はひしひしと伝わってきたが、とにかく厳しかった。あの有名な西中の土手を何百周走ったことか……。でもノックは上手だった。それで上達した先輩、同輩、後輩は沢山いた。葬儀の時、先輩の遺影の前で、先輩が作詞作曲した「西中野球部の歌」を歌わせていただいた。涙が止まらなかった。

1年生の夏、超大型チームの西中だったが、秋田市予選で何もしないうちに負けてしまった。そんな気がしている。夏までの選抜大会はことごとく優勝してきたが、一番欲しかった優勝旗は獲れなかった。

長い夏休みは暑さとの戦いだった。それに今とは違って水を飲むことが許されない時代である。喉の渇きとの戦いでもあった。練習の帰り道、自宅近くの公園の水で顔を洗い、頭から水をかぶった。その一瞬が気持ちよかった。とても辛い期間であったが、よくも耐えて倒れなかったものである。もちろん全く水分を取らなかったわけでは無い。牛乳や100%の野菜ジュース、味噌汁などは飲んだ。水は炭酸水などは御法度である。よく耐えたものだ。

2年生になった。前年に先輩たちが地方の選抜大会で沢山優勝してくれていたおかげで、試合は沢山あったが、ことごとく優勝旗は返してきた。前年があまりにも凄い大型チームだったので、この年のチームはやや見劣りはしたが、成長は著しかった。負けた分だけ沢山練習した。受けたノックの数は半端ではなかった。この時の思い出はただただ守備練習をしている光景だけである。

しかし、そんなチームにも陽の当たる時がきた。全県少年野球秋田市予選。昨年逃した優勝旗を、今年はこの優勝旗だけを手にした。たったの1本だったが、一番価値のある1本だった。嬉しかった。準優勝の山王中学校とマウンドを境に並んだ表彰式では、一番ユニフォームの汚れていた私が、笑顔で写っている写真が忘れられない（今探している）。中学2年生の夏、初めて全

県少年野球大会に出場することとなった。

大会は約1ヵ月後の8月上旬開催予定であったので、夏休みに入ったら、角崎先生は近くの旅館を宿舎にして合宿を行った。夏だったので暑かったとは思いますが、全県大会に出場できる嬉しさからか、大きな声を出して元気に練習していた。その時に角崎先生に言われた。「おまえ、タフだな」って。その時は「タフ」の意味が分からなかったのので、「『タフ』ってなんですか」って聞いたら先生は苦笑いして、「元気だ」ということだ、と言ってくれた。それがとてつもなく嬉しかった。そしてその一言で夏に強い男になれた気がする。さらには、夏には絶対倒れない選手にならなくてはいけない、先生の期待に応えられる人間にならなくてはいけない、と感じていた。

全県大会が始まった。1回戦は大沢郷中学校。夕暮れの県立球場で快勝。八橋球場に移って本荘南、八幡平を撃破、ついに中仙中学校との決勝戦を迎えた。あとで知った話だが、相手の中仙中学校の監督さんは、角崎先生の前の西中の監督さんである。不思議な因縁である。

試合は2-0でリードしたまま最終回。ツーアウトまでこぎ着けた。しかしここからが大変だった。西中のエースの鈴木光一さんは、準決勝の第2試合から連投である。1時間もない休憩を挟んでここまで投げてきた。驚異的な体力である。今なら考えられない酷使ともいえるべき状況だったが、球威は衰えず、小雨の中でも、マウンドの泥も、ボールの滑りも全く感じさせない素晴らしいピッチングだった。守備についている先輩方も精一杯声を出し、エースの鈴木さんを激励した。私も丁寧にキャッチングすること、ボールを少しでも濡らさないこと、返球は鈴木さんの左胸に、と、できることを精一杯やった。西中のチーム全員の気持ちが1つになって勝利を目指した。しかし、勝利の女神は微笑んでくれなかった。3年生の夏は全県準優勝で終わった。素晴らしかった。先輩方は誇りだ。心から感謝している。

大会が終わって間もなく、新チームはスタートした。キャプテンに指名されて来年こそは全県優勝だと頑張った。

夏休みのある日の練習のこと。基本練習として内野でのボール回しをしていた。その様子を見ていたコーチの文先輩が、もっとしっかりやれ、ということで、そのボール回しの難易度を上げていった。普通はボールを1個か2個でやるのだが、そこに3個、4個とボールを入れて、最終的には4個でノーミス1分間ができれば終わりというものであった。

野球をやった者であればこの難しさが分かると思うが、これを中学2年生8人でやれというのである。プロ野球選手ならまだしも、これはかなり難しい注文であった。案の定失敗は繰り返された。1分間が途方も無く長く感じられた。いつ終わるのだろうと思いながらかなりの時間を費やしたが、なかなかできなかった。そんな時、思いもよらぬ副産物が見えてきた。炎天下で単純なことの繰り返しを延々とやっていたため、みんな疲れと出口の見えな

いトンネルにいらいらし始めていた。すると、プレーしていた一人が暴投を投げた相手に向かって、「おい、しっかり投げろよ！！」と怒鳴った。俗に言う「キレた」状態だった。無理もないことだと思いながら、「怒ってもしょうがないよ、また頑張ろうぜ」と声を掛けた。自分でも咄嗟にこんなことが言えるのは意外だったが、紅潮した顔の彼は、ふっと我に返ったようで、また冷静にボール回しを始めた。

どれぐらいの時間が経ったか分からなかったが、ついにその練習も終わりを迎える時がきた。「・・・5、4、3、2、1、ゼロー！」周りで見っていた全員が大きな声でカウントダウンをしてくれて、長く辛かったボール回しは終わった。喜びの声もあったけど、終わったという安堵感でみんな座り込んでしまった。文先輩も満足だったのではないだろうか。限界に近い状態まで追い込まれて、身体は知らず知らずのうちに正確なボールを投げる形を覚えていったのだろう。ここまで忍耐強い文先輩は名コーチだったと思うし、そんなコーチから指導を受けて幸せだった。おかげでキャッチボールには自信がついた。だから野球が続けられたのだと思う。

3年生になって最後の大会。2年連続の県大会出場を目指して、ついに秋田市予選の決勝まで勝ち進んだ。目標達成まであと1勝である。チームの状態は悪くなかったが、劣勢のまま試合は終盤を迎えていた。相手の攻撃、一死三塁。打者の打った打球は三塁前のゴロ。三塁手が捕ってバックホーム。走者に重なりそうな送球だったが、当たらず私のミットへ。その時私はタッチを焦った。コンマ何秒か早く走者にタッチしようとしたため、三塁手からの送球をミットの先端に当ててはじいてしまった。このプレーで、相手に決定的な追加点を許してしまった。万事休す！県大会出場はならなかった。

昭和53年の春、秋田高校に合格し、硬式野球部に入った。まず感じたことはレベルの違いだった。硬式ボールで野球をするのもこれが初めてだったこともあって、投げるボールの速さや打った打球の速さに驚いた。固い石のようなボールがものすごい勢いで飛んでくる様子に正直言ってビビってしまった。正直不安だったが、1つ上先輩の鈴木光一さんにいろいろ教えてもらっている間に、少しずつその不安と恐怖感は薄れていった。

1年生の硬式野球部員がまずやることは、あいさつ・礼法の徹底、グラウンド整備、道具の手入れと管理だった。

朝、7時前からグラウンドに出て、2年生に指導を受けながらグラウンドの整備をした。レーキでグラウンドの凸凹を無くし、削った土をトンボで細かく砕きながら均一に地面をならしていく。トンボを一度強く押しながら地面をならし、たまった土を均等にならしていきのだが、これが結構難しい。溝や山ができないように（先輩の指導は「鏡のように」だった）ならしていきるのは容易ではない。授業が始まる前に広いグラウンド全面を整備するのだ

から大変である。夏など、朝から汗だくである。本当に大変だった。

そんなときに先輩から言われたことを思い出す。「もしお前が整備をしたところで打球がイレギュラーして先輩が怪我したらどうするんだ！！責任とれるのか！」その言葉がずっと頭から離れなかった。

高野連の役員になってこまちスタジアムのグラウンドをならず機会があったが、とても楽しかった。同時に選手たちが怪我をしないよう、いつも祈っていた。グラウンドはとてもいいところである。そこは選手を育ててくれる場であり、元日本高野連会長の八田英二さんの言葉を借りれば、「グラウンドは学校という学び舎を離れた教室」だそうだ。「高校野球は教育の一環である」ということを、常日頃から口にされる八田さんならではの表現かなと感じた。高校時代、きつかったけど頑張ってたよかったです。この経験は指導者になったときも生きたし、今でも私の自信につながっている。

私の試合デビューは突然訪れた。横手工業との練習試合前に1年生でグラウンドに水を蒔いていたところ、先輩から「尾形、試合に出るから着替えろ！」と叫ばれた。どうしていいものかわからずうろろしていたら、2年生の先輩から、「倉庫の茶箱の中にゲーム用のユニフォームがあるからそれを着てくるんだよ！」と教えられ、急いで倉庫に向かった。教えられた茶箱にそれはたくさんあった。どれを着ようかと迷っていたとき、サイズの適当な中で、一番古いものを着てグラウンドに戻った。試合前のミーティングが始まっている中に戻ったら先輩方に変な目で見られ、笑っている先輩もいた。「1年生の分際で、偉そうに試合に出るのかよ」と思われているようで気まずかった。円陣が解けてから監督に呼ばれた。「もっといいユニフォームはなかったのか？」と苦笑いされながら言われたときは、なんとなくほっとした。そして、とにかく精一杯頑張ろうと気持ちを切り変えた。

試合では慣れない三塁を守りながら無我夢中でプレーしていた。打撃成績は4打数4安打。相手投手は結構評判の投手だったようだが、どういうわけか打てていた。おまけに午後の試合も先発メンバーに選ばれた。そして午後の試合。2打数2安打。出塁したところで交代したが、みんな驚いていたようだ。当の本人はとにかく必死でプレーすることと、先輩方の気分を害さないよう気を遣いながらプレーしていただけである。なんとか一日終わった。

そんなこともあって、その年秋田県で開催された春季東北地区大会では、背番号16をもらってベンチに入った。しかもその初戦、相手は黒沢尻工業だったと思うが、先発で出場した。何回かは忘れたが、強烈なサードゴロが飛んできて夢中でグラブを差し出したらボールが入ってくれた。ここまでは良かった。起き上がって1塁に送球をしようとしたが、急に不安に襲われ、やや山なりの力の抜けた送球をしてしまった。アウトにはなったものの、ベンチに帰ったらいきなり怒られた。そして交代させられた。無理もないというか、当然のことである。あんな自信の無いプレーをしてしまったのだから。

以来、どんなときも全力でプレーするようになったし、指導者になってからも、ミスを恐れず全力でプレーすることを心がけさせた。

私が高校に入学した頃の秋田県の高校野球は、今思えばとてもレベルが高かった。能代高校の高松投手、本荘高校の工藤投手、秋田商業の高山投手、金足農業の小野投手、経法大付属高校の松本投手とプロ野球や社会人で活躍する選手がたくさんいた。中でも同期の高山投手には、ことごとく行く手を阻まれ、結局在学中は甲子園に行けなかった。彼は2年の夏、3年の春、夏と、3季連続で甲子園に行っている。素晴らしい投手だった。189センチの長身から150キロ近い豪速球を投げられては、最後の大会も90球足らずで完封負けを喫してしまった。悔しかったが、諦めもついた。

高校時代はよく練習した。休みなど、年始の3日間ぐらいのものか。お盆は13日の午後と14日の午前が休みだった。監督さんが「盆は1日休みをやるぞ」と言ったのでみんな喜んでいたが、それは当日の午後と翌日の午前の休みを合わせれば1日の休みだろというのである。納得できなかった部員はグラウンドに水を蒔いて暴れた。気持ちはよくわかった。

昭和54年の夏はとても暑く、夏休み中は1日も雨が降らなかった。おかげでグラウンドの雑草までが干上がって、踏むと「しゃりっ、しゃりっ」と音を立てて砕けた。そんな中、1日いっぱい練習した。しかも当時は水を飲むことは許されなかった。昼の弁当が喉を通らなくて大変だった。監督さんは今、当時を振り返っていろいろ反省しているようだが、練習や休みに全く問題は無かったと思っている。ただ、食事の時だけはたくさんの水分補給を許して欲しかった。今でも、食事だけはしっかり摂れるよう配慮することが大切だと思っている。

高校野球を終えるに当たり、1つのエピソードを紹介する。2年生の夏、新チームが結成されたとき、キャプテンに指名された。その時、どういうわけか、来年（3年生）の夏に甲子園に行くためにはどうすればいいかを考えた。絶対に後攻めをとりたかったので、そのためには試合前のじゃんけんに勝たなければいけなかった。どうしたら勝てるか。ある方法を実践した。

新チーム結成以後の試合は練習試合を含めてすべての試合前のじゃんけんはグー（石）を出した。1年間、勝っても負けてもグーを出し続けた。そして本番。夏の予選。今度はすべてチョキ（はさみ）を出した。すべて勝ち続けた。作戦は見事に成功した。想像はつくだろうと思われるが、「尾形はじゃんけんではグーしか出さない」という評判を、一年かけて作り上げたのである。そして、みんなそれを信じてパーを出してきたので、私はチョキを出して勝ち続けたのである。これだけは面白いように当たった。高山君の剛速球は打てなかった（当たらなかった）が・・・。

（つづく）